

北九州市農林水産業振興計画検討会（第1回）議事要旨

- ・ 計画を策定するために検討会が開かれ、いろいろな方々の意見を聞くことには賛成する。こうして意見を聞いてまとめた計画を行政がしっかり実行していただきたい。
- ・ 小倉牛については、北九州市の処理場では格付けができないので、太宰府に運んで格付けしてもらっている。処理費用は太宰府の方が安い、運搬費用がかなりかかる。
- ・ 森林が荒れれば農地も荒れる。山が整備されることによって農地が守られ、雨が降るたびに養分が海に流れるから漁業にとっても良いことだと思う。
- ・ 学校給食での利用促進や親子で農家に視察に行くなどして、幼児期の頃から北九州市にどのような農林水産物があるのかについて興味や関心を抱ける環境づくりが、農林水産業のファンづくりという意味でも、担い手を作るという意味でも必要になると思う。
- ・ 一般の方に農業体験をしていただき、そこで作ったものを食べていただくような、農業に参加していただける機会を設けている。こうした活動により、将来的に就農していただければ良いとは思いますが、まずは北九州市の農業について知っていただきたいと考えている。
- ・ 農業後継者については、非常に重い課題である。新規就農と農家の子弟が就農される場合があるが、新規就農は北九州市内ではなかなか難しいところがあるため、行政と一緒にやっていきたい。
- ・ 農家の子弟が後を継ぐ形は年に数件あるが、子弟の方が農家を継続したいと思うためには、やはり現状の農業が成り立たないといけないので大きな課題がある。特に小倉南区の方で農業継承に関する施策が今後、必要であると思われる。
- ・ 農業は物を作っても最低でも3ヶ月経たないと収入にならないが、会社勤めであれば、その月に生活費が入ってくる。農機具だけでも田植え機、コンバイン、トラクター等、少なくとも1,000万円近くかかり、加えて倉庫の費用もかかる。元手がかかる割に、収入にならないので、農業をやめている人が多い。
- ・ 農家数の減少は、日本全国の各地域に共通的にみられる傾向である。
- ・ 農家の中には、サラリーマンだが農地を持ち、家庭菜園的に栽培されているような方も含まれる。議論にも関係すると思われるが、農家もものすごく多様化している。他に収入があって農業で生計を立てていないが、家に農地があるから農業をしているという方から、農業法人という法人形態で農業経営をされている方まで、農家は極めて多様である。
- ・ 専業農家を最後までやるという形態もあるが、民間企業等で働いた後に農業経営を始める方も、全く農家でなくても農業に参入して個人経営あるいは法人経営を立ち上げて、10数年で県内随一の農業経営体を作っている例も決して珍しくはない。
- ・ 全く農業と関係のない都会で育った方が農的な生活、農業に関心を持って農業法人に就職することもあるので、農業法人に就職されている方も重要な担い手だと思う。ゆくゆくは自立して個人経営を始めるかも知れないし、新たな農業法人を設立するかもしれない。
- ・ 個人の経営、法人の経営、法人の経営で働いている従業員の方など、農業従事者になろうとする方、あるいはなっている方のキャリアパスというか、農業をするまでに色々なルートがあるということをもう少し具体的にイメージすると、色々な政策を打ち出しやすくなるのではないかと。

- ・ 「地産地消の推進」や「市民との共生・協働」も、こうした話と関係していて、食育であったり、直売所等で地元の農産物を食べたり、農業体験したりする中で農業に関心を持って、農業経営の方に進むというルートもあり、街で育った学生でもそういうきっかけがあって、農業法人に就職をして、ゆくゆくは独立をしたいという方もいる。「地産地消の推進」と「市民との共生・協働」のところも全部つながってくると思う。
- ・ 具体的には、幼稚園幼児から小学校・中学校・高校、あるいは子育てしている母親など、農業や食料に関心を持つ方をもう少し具体的にイメージして、その方々にできるだけ幅広く、農林水産業に関心を持っていただく機会を提供する。その中に、学校給食や食育といったものを体系的に位置付けていくことができるのではないかなと思う。
- ・ 骨子の大枠に全く異論はないが、さらに有機的に各項目をつなげると、より政策が打ちやすくなるのではないかな。
- ・ 水揚げが減少し、漁業者も減少・高齢化している中では、やはり獲る漁業からつくり育てる漁業へ転換しながら、収入がそれなりにあり、魅力があるという方向にもっていかねばならない。直売所や養殖に取り組もうとしているが、まだ行き届いていない。
- ・ 海を相手にしているのが、収入が安定しないのが一番大きい。特に今はコロナ禍や海水温の上昇等で非常に厳しい。1年に1回、新規加入を募集するが、20代が一人来るか来ないかというのが実情である。
- ・ 環境が変わると藻場が減少する。沿岸漁業は回遊魚を獲っているのが、海水温が上がると獲れる時期が違ってくる。
- ・ コロナ禍ということもあり、現役の漁業者は、今までとは違い、直売所等を利用しながら自分たちで産業を作り上げなければならないという気持ちになってきている。
- ・ 北九州では、個人で林業で生計を立てている方はいないと思われる。森林組合の方が、森林環境税を利用して人工林の間伐等を行っている。
- ・ 間伐をしようにも山の境界が分からない。森林環境譲与税を利用して境界や森林の面積をある程度確定していけば、国土調査がやりやすくなると思っている。所有者は高齢化しているので、5~10年経って次の世代になると自分の山の境界が分からなくなるのではないかなと思う。一刻も早く境界を確定する必要がある。
- ・ 一番の問題は放置竹林である。放置竹林の解消のために人工林なり、広葉樹等を植えており、合馬地区でも少しずつだが、まちづくり協議会が主催してクヌギ等を植える取り組みを行っている。
- ・ 子供たちの食育は非常に重要だと考えているが、高校生でも地産地消を知らない学生がいて、本当に驚いたことがある。
- ・ 季節に応じて野菜や魚介類など、北九州市内産のものを使っており、身体に良いということで、地産地消に力を入れている。
- ・ 子ども食堂の手伝いをさせていただいたが、地産地消や地域で作られた野菜については、子ども食堂の活動をする前には知らなかった。
- ・ 小さな頃から農業などにもう少し興味を持ってもらえるような活動があれば、もう少し担い手の確保につながるのではないかなと思う。
- ・ 担い手の確保と北九州市内産の生産量を維持・拡大するためには、生産者の安定した収益の確保が必要である。

- ・ 消費者に市内産青果物を認知してもらうためには、ブランド力の強化が重要である。特に小倉南区の鍋しゅんぎく、合馬たけのこ、若松産の潮風キャベツ、潮風プレミアム（大玉すいか）は、他の地域の青果物と比較しても、品質や食味を自慢できるこだわりの品目で、全国に発信できる品目だと考えている。認知度向上のため、地域をあげた宣伝活動を行うことが必要ではないかと思う。
- ・ やはり食育が重要であると考え。子供たちに、自分の住んでいる市内にこんなに美味しい野菜や果物があることを知ってもらって、その子供たちが学校で学んだことを家庭に帰って家族に伝えてもらうことが大事ではないか。
- ・ 学校の授業や給食で地元の野菜や果物を見たり触れたり、食べる機会を増やすこと、また、市内産の野菜や果物の収穫体験や、社会科見学による市内青果物のほ場視察や選果の見学などの機会を増やすことも大切であると考えている。
- ・ 市内や、地域外消費者の認知度を向上させて、安定した価格で取引されることにより、生産者の生産意欲向上から生産拡大が図られ、食育を受けた子供たちの中から、美味しい野菜や果物を作りたいと思う将来の担い手が増えてくるのではないかと考える。
- ・ 農林水産業は、その存在自体が環境保全に役立っていたり、SDGsの色々な面に役立っていたりするので、農林水産業を振興することで、環境保全やSDGsの達成に役立つということは多分間違いがない。その視点は最近も大きくクローズアップされているので、これは追い風である。
- ・ 一方、農業そのものがSDGs的なものになっているのかという視点が問われる時代になってきていると思う。例えば、農薬を使用していることが土地にどのような影響を与えるのか、健康にどのような影響を与えるのか、といったことが、今、問われている。
- ・ また、農業や林業、あるいは漁業に従事している方々が、例えばジェンダーバランス的にどうなのかというようなことが問われている。
- ・ SDGsの視点から農林水産業を振興するプラスの面と、農業・林業・水産業自体をSDGs化していくという課題の面と両方ある。骨子案の中に、単純に「SDGsの目標達成に貢献する」とあるが、農林水産業そのものに、どうSDGsの視点を組み込んでいくのかということこそ是非入れていただきたい。
- ・ スマート農業全般については、まず技術的に出来ることと出来ないことがあるということである。もう一つは、技術的に出来ても、それを導入することが、経済的に採算が合う場合と合わない場合があるということである。
- ・ 技術的にかなり確立していて、経営によっては採算が合うものとしては、例えばキャベツの自動収穫ロボットであり、人間と同じぐらいの精度で自動的にキャベツをカットしていくが、こういうものは既に、いくつかのキャベツを大規模に生産している農業経営体で導入が始まっている。あまり小規模だときっと採算が合わないと思われるが、そういう技術は試したり、検討したりする価値がある。
- ・ トマトについて、温室の中に温度センサーや湿度センサー、溶液のセンサー、あるいはトマト自体の生育状況をリアルタイムで計測するようなセンサーとかロボットなど、そういうものも技術的には開発されていて、トマトを自動的に収穫するロボットというのも、色々なところで研究開発が進んでいる。このあたりについては、もうかなり経営によっては実用的なレベルに達しているということである。
- ・ 水稻に関しては、ドローンで肥料を散布するなどというのものも、100ha規模で実際に取り組んでいて、「意外に使える」というような生の声もある。

- ・ 色々な技術があるが、テレビあるいはニュースで聞くだけだとなかなか実感を持ってないと思うので、農林水産省もスマート農業の実証事業という、そういう取り組みに対して助成する事業をやっており、そういうものをうまく活用して、関心のある農業関係者あるいは試験場関係の方がコンソーシアムを作って、農業者の方も入る形で試験的に実証してみるということが、こういう大きな流れの中では必要なのではないかと思う。
- ・ 重要なことは、そういう新しい技術が採算に合う経営と合わない経営があるので、そこを見極める必要がある。メーカーは導入を促進したいけれども、農業者側から見ると、そういうものを導入したときに、本当に改善になるのかどうか分からないという、新しい技術ならではの特徴もある。
- ・ 補足すると、多くの方が使えるものとして草刈りロボットがある。今、色々なメーカーが研究開発して商品化しようとしているが、例えばゴルフ場の芝刈りをするようなロボット等はもう実用化されており、大手の車メーカー等もそういうものをを出している。草刈りは、小規模な農業経営から大規模な農業経営まであらゆるところで必要になるので、農業生産に直接ではないけれども、関連する作業として草刈りの自動化・ロボット化というのは波及範囲が広いのではないかと思う。
- ・ 農林水産業を行っている人々が、これからどのように暮らしていけるのかということが大切ではないか考える。
- ・ 森林所有者や農家の方は、実は農村の住民の方々、農山村に暮らしている方で、その方々の暮らしが5年後、10年後どうあるのか、次世代の方々にとって、これからこの北九州の農山村地域でどのような暮らしがあるのか、そして新しい住民の方々がどのように農林水産業に関わるのかということ、人に注目した視点を置くというのはとても良いことではないか考える。
- ・ 農林水産業のファンを増やすというのが、「強化すべき分野」にあるが、その「ファン」というのは実は1番上の「担い手の確保」にとっても近い、実は継続的これからもやっていくべき課題なのではないかと思う。
- ・ 畜産などの例のように市内では完結せず、他の地域と関わらなければ成り立っていかないものもあるので、広い色々な業種、広い人々との関わりも踏まえた上で、北九州の農林水産業のあり方を考えていくということも大切なのではないか。
- ・ 「担い手の確保」はすごく重要なことであると思う。一方で、農家の担い手も多様であるため、どういう担い手の確保が必要なのかということをもう少し明確にするべきではないか。
- ・ 農林水産業のという産業振興という視点で言えば、「担い手の確保」がKPIとして適切なのか。「耕作放棄地の解消」等の方が重要なのではないか。お小遣い程度に稼げる農家を増やすのか、農業で食べていける農家を増やすのか、そのあたりの話である。
- ・ SDGsについては、施策体系についてはこれから考えるということだが、ゴールのロゴを貼っただけではあまり中身がないので、どう関係するのかということを考えていく必要があるのではないか。
- ・ 骨子案の真ん中にある「継続的な課題」「強化すべき分野」「新たな視点」に、それぞれ囲んであるキーワードの書き方について、「担い手確保」「所得向上」等は、これから推進していくものであるのに対し、一番下にある「温暖化」「新型コロナ」等は、推進していくものではなく、これから課題として解決すべきというものなので、書きぶりを統一された方が分かりやすいのではないか。
- ・ 草刈りロボット等の話もあったが、草刈り機の性能の良いものが出ており、トラクターで10aを数分くらいで刈っていくものもある。しかし基盤整備が進んでいないので、非常に効率が

上がらないというか、危険性を伴う。基盤整備が行き届いていれば、作業を受託する人も安心して受けられる。

- ・ やはり基盤整備をお願いしたい。基盤整備をしていけば機械も入るし、耕作放棄地も減ると思う。
- ・ 生産物の最低保証価格があることが望ましい。生産者は自分で価格を決められないので、収支の目途を立てられない。市場に出荷する際に箱詰めするが、価格によっては箱代にもならないこともある。努力して作っても、それに見合う価格が付かなければ作り手の達成感につながらない。「食」は人が生きる基本なので、それを支える農業の価値を正當に評価すべきだと思う。
- ・ 担い手の確保のためには、やはり絶対に儲かるという保障、農業で食べていけるという保障が必要である。悪い時のどん底がひどすぎるので、努力すればするだけ報われる農業になって欲しい。
- ・ 法人化して良かった点は、人を雇って大規模にできること、休みを取れること、作業の段取りが速くなったことである。個人よりは効率的にできているのではないかと思う。また、個人経営のときに比べて、人との関わりが増えたことは法人化したことの財産である。
- ・ 一方、法人として人を雇う以上、労務管理など義務も発生する。法人化すると、経理関係や登記関連の事務が発生し、人件費や社会保険料などの固定経費もかかる上に、土地の権利関係等も絡んでくるため、ハードルが高い部分があると思う。
- ・ 法人化して地域貢献も考えるようになった。農業をやめた農家の農地を借りて荒廃を防いだり、地域の人々を雇用したりしている。産直取引では地元の郵便局とタイアップしており、郵便局の存続に寄与している。郵便局は地域の唯一の金融機関であり、撤退すると地域に住む人がますます減ってしまう。
- ・ 担い手確保という観点から、やはり基盤整備が最も重要である。基盤整備ができているところには後継者もいる。ただ、基盤整備をするには地域の人々の理解と協力が必要である。今は農地を売却したいと考えている農家が多いので基盤整備は難しく、そのような中で農業が発展することは難しい。
- ・ 防災の観点から、井堰やため池等の農業用施設の劣化状況の把握し、老朽化した施設の早急な整備が必要である。
- ・ 農業用施設の整備にあたっては、農業従事者の高齢化に配慮して、高齢者でも安全で簡単に取り扱えるようにすることが必要となる。
- ・ 農家が安全かつ効率的に農作業を継続できるようにするためには、農地の区画を広げて、大型機械での作業が可能となるほ場整備が必須である
- ・ 農家や漁師の仕事を実際に経験する農業・漁業体験や、その食材を使った料理作りを行うことにより、その仕事に興味をもち、北九州市の食材について知っていただく機会になるのではないか。
- ・ 農林水産業が都市に近いという点を活かして、北九州市内の直売所からの宅配サービスを実施することが有効だと考える。新鮮な食材や直売所の商品を購入したいが、コロナ禍であまり外出できない方や、運転が出来ず、足の不自由な高齢者の方にもサービスを利用してもらうことで、市内農林水産業のファンを増やすきっかけになると考える。
- ・ 過去5年間に農林水産業をやめた方々の理由や諸条件、今後5年間にやめる予定があればその具体的な要因や問題、あるいは持続できる条件等の調査が求められるのではないかと。例えば、可能であれば同居・別居している跡継ぎの方の意向についても調べられるとよいのではないかと。

- ・ 農林水産業に関わる「人々」の暮らしを創り、暮らしを支える視点や施策があるとよいのではないか。特に農家数の減少が著しく、大きな岐路の時期と思われる。現状は農林水産業だけでなく、北九州市の人口の施策にも関わるため、市政の横断的な領域になってきたと思われる。
- ・ 農業と林業それぞれの施策に加え、地域の人々の暮らしに視点をおき、農業と林業を分けずにとらえることも有効ではないか。市内には、森林所有者（森林管理者）であり、かつ農地所有者（農地管理者）である方々が多く、それぞれに様々な経営や配分で農林業と関わっていると思われるので、どのような組み合わせで産業や生業を立てているのかという実態や、そのような人々がいかに山林や田畑とともに暮らししてきたかという歴史を知り、今後いかに暮らししていくかという農林水産業に取り組む暮らしの将来モデルは、北九州市ではどのように描けるのか。そして、産業や生業をやめても資源の管理者であり、森林、農地の有する多面的機能の発揮の担い手であるため、住民（暮らし方）の視点を含めた計画になると思う。
- ・ 骨子案の「施策を進める特徴的な取組」として、「将来を話し合う場を地域単位で設置」することは、ぜひお願いしたい。
山林をどうするか、所有山林の境界問題をどう扱うか、集落の資産や歴史をどう継承するかといった本質的な話も、農林業の将来と密接であると思われる。ここに今、時間をかけることが重要ではないか。
- ・ 新規参入者の支援に関して、北九州市での自然に接する農林水産業のある暮らしのモデルを示し、魅力を伝えることを期待したい。
- ・ 魅力的な農林水産業の環境を示してはどうか。例えば、小倉南区合馬地域では、低く連なる山なみ、水田と竹林の黄緑色、そして赤瓦の民家が並ぶ山辺の盆地景観が特徴的である。竹林拡大等の問題もある反面、景観としての竹林は美しい農村景観の構成要素であるなど長所も豊かである。伝統的環境、文化的景観といった環境の価値を農林水産業の誇りにつなげることを、農林行政の中心的な方針に位置づけられないか。そして、農林水産業のある景観や環境が、北九州市の顔としてもっと認知されたいと願う。
- ・ 農林水産業と観光とのつながりも、農林水産業や農山村・漁業エリアの魅力の創造に寄与するのではないか。現状の行事・祭りやイベントもあるが、農山村地域の人々が訪問者と交流しやすくなるような、地域の魅力を伝えられるような内外の交流を重視してもよいと思われる。こうした環境の価値認識や新たな地域概念の構築、そして観光的要素の発信などは、担い手の確保につながるものと考えている。
- ・ 骨子案の基本方針に「都市と共存する農林水産業」とあるが、この「共存」という方針には意義があると感じている。
- ・ 都市住民で、特に高齢者の方々が、心の生きがいや身体のために農林水産業とゆるやかに関わられるような福祉的な施策があるとよいのではないか。
現在の都市の高齢者の方々は、幼い頃は自然の中で育った方も多いと思われ、自然と関わる農林水産業で作業の手伝いをするような余暇活動があれば、人間関係も構築できて幸福に暮らせる一つの方法になると思う。農林水産業と都市の共存をねらいとすると、都市住民と農林水産業従事者が、お互いになくってはならない存在になる施策ができれば、それは「施策体系」の「6市民との共生・協働」のうち「農福連携の促進」に近いものであると考えている。
- ・ 骨子案で、目標を「2020年の生産水準」におくとあるが、この水準におく理念はどのようなことか。例えば、市内ではこの水準の一定量の食料生産を確保することが重要であるなど、市民に分かりやすく、施策を推し進めやすい目標値があるとよいと思われる。
- ・ 市内外の卸売市場や小売店舗等で引き合いが強く、さらに多くの生産量が期待されている品目について、何らかの支援策があるとよいのではないか。

- ・ 骨子案の「施策体系」「2生産力向上」に「木材の利用促進」があるが、市役所関連施設やその他の商業施設など、北九州市産の木材を使って、居心地のよい場所などを創り、市民の愛着や関心などを得ることができればと期待する。
- ・ また、「木材の利用促進」にあわせ、木材流通と林産業についても、市外との連携や市内での創出等と合わせて、「2生産力向上」のところに含めて検討されたい。各種ある木材や竹材が、森林から効率よく、経済的に生産流通できるよう、新たな施策ができることを期待する。
- ・ 荒廃竹林（放置竹林・竹の侵入した荒廃森林）の管理に、ロボット技術やAIを使えないか。除草剤を使う必要がないような管理方法を望む。
- ・ 市内の大学教育で、専門分野に関わらず、在学中に一日でも、農林水産業を現場で体験学習や手伝いができると生き方の提案になると思われる。大学には、市内外から学生が集まっており、どちらの出身にしても、自分に問いかけ、将来を考える時期ということもあり、農林水産業を体験することに意義があると思われる。
- ・ 農事センターや市役所などの拠点で、農林水産業に従事されている人々とつながる現地教育、現地観光のプログラムなどを、教員や観光業者と連携して提供していくことで、「強化すべき分野」にある、「農林水産業のファンを増やすとともに、市民が農林水産業に関わる機会を創出」に寄与できると期待する。また、農事センターに、移住関係の窓口をおくことは難しいか。